

## 14日 水曜

マルコ

14:32 さて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」

14:33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、

14:34 彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」

14:35 それからイエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。

14:36 そしてこう言われた。「アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」

14:37 イエスは戻り、彼らが眠っているのを見て、ペテロに言われた。「シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか。」

14:38 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」

14:39 イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。

14:40 そして再び戻って来てご覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたがとても重くなっていたのである。彼らは、イエスに何と行ってよいか、分からなかった。

14:41 イエスは三度目に戻って来ると、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのです



か。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。  
14:42 立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」

イエス様の十字架の苦しみはここゲツセマネから始まりました。三位にして一体である父なる神から捨てられることは、「悲しみのあまり死ぬほど」の苦痛なのです。しかも3年間ともに歩んできた弟子たちは、イエス様への思いよりも眠気の方が優先で、その後の裏切りと逃げ去りを思わせるような悲しい態度でした。

その中で主イエスは、人間となられたゆえの弱さを抱えながら、すなわち肉体の苦しみと恐怖心と戦いながら、十字架へ向かう祈りをささげたのです。「この杯をわたしかた取りのけてください。」と祈ったのは、自分の願いを押し通そうとするものではなく、「みこころのままを、なさってください。」というように、主のみこころへと進む決心を固めるためのものです。

祈りとはこのように、主のみこころを知って従う決心を与えられるためでもあります。十字架の愛を受け継ぐ私たちも、それぞれの十字架を負うために、そしてその後の勝利と賞賛をいただくためにも、主イエスの祈りを模範としましょう。主は「耐えられぬ試練にあわせることは(1コリント10:13)」されないからです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

